

ウェルカムパーティーで抱負を語る留学生



国際交流協定校などからの短期留学生が日本語を学ぶ「秋期日本語・日本事情プログラム」および「豪州のヒアンカ・ヤン」が9月24日、生田キャンパスで開催され、奥村経世国際交流センター長や学生らが歓迎した。受講する短期留学生34人は、初級から上級まで

日輝かせ日本を学ぶ 短期留学生34人が来日



マヌエラさん



ヴンシュマンさん

6クラスに分かれて日本語を勉強し、うち24人はBCLで日本のビジネスや文化を学ぶ。豪州のヒアンカ・ヤン・マヌエラさんは働きたいからウーロンゴン大学で会計学を学んでいる。「20年ほど前に日本に短期滞在した。日本に留学するのはその時からの夢。日本語は独学で4年間学んだが、まだまだ」と決意を話した。ドイツのトリリア大学から来たBCL受講のステフェン・マンフレッドさんは「子どもの時から日本の文化や歴史に興味があり、日本学があるトリリア大学に入学した。専攻は法学で、ドイツと日本の法律を学んでいる。日本語を勉強するとともに日本の文化にたくさん触れていきたい」と目を輝かせた。

プログラムは12月14日まで。受講生は国際交流会館で寮内留学プログラム受講の日本人学生と生活を共にする。

留学を体験した6人によるパネルディスカッション



カルガリー大学のキョクさん。国際交流への理解を深めた。留学を体験した専大生6人によるパネルディスカッションでは、アメリカ、アイルランド、カナダ、メキシコでの留学体験を発表。会場からの質問も活発だった。留学生による異文化理解講座「留学したい気持ち」は、カルガリー大学の交換留学生ジェイコブ

秋の海外留学・国際交流フェア「第18回海外留学・国際交流フェア」が10月5日、生田キャンパスで開かれ、35人が参加、国際交流への理解を深めた。留学を体験した専大生6人によるパネルディスカッションでは、アメリカ、アイルランド、カナダ、メキシコでの留学体験を発表。会場からの質問も活発だった。留学生による異文化理解講座「留学したい気持ち」は、カルガリー大学の交換留学生ジェイコブ

司法試験 7人が合格

法科大学院修了者

同期で切磋琢磨 大崎さん

2019年の司法試験結果が9月10日、法務省から発表され、専修大学法科大学院修了者から7人が合格した。うち4人は今春の修了者だった。合格者は次の通り。

- 柏木 優孝さん(平28)
- 橋本 隼人さん(平29)
- 大西 龍さん(平30)
- 岡田 孟さん(平31)
- 石島 秀輔さん(平31)
- 大崎慎乃祐さん(平31)
- 米原 亨一さん(平31)

都合により写真は掲載致しません

岡田孟さん

都合により写真は掲載致しません

柏木優孝さん

都合により写真は掲載致しません

石島秀輔さん

都合により写真は掲載致しません

橋本隼人さん

都合により写真は掲載致しません

大崎慎乃祐さん

都合により写真は掲載致しません

大西龍さん

都合により写真は掲載致しません

米原亨一さん

専大法学部卒業後、法科大学院で学び、司法試験に合格した大崎慎乃祐さんに話を聞いた。

中学生の時、職業体験で弁護士について調べる機会がありました。小学生の頃から得意だったデベートと裁判は似ていると思い、それから弁護士の仕事を意識しました。法学部に入学した時から、法科大学院に進み司法試験を目指すことはミを開催。同期の岡田さん、大崎さん、米原さん、石島さん、橋本さん、大西さんと切磋琢磨して、4人も一発合格。

心を決めていました。刑法が苦手だったので克服しようと、法学部では刑法の寺島秀昭ゼミに入りました。勉強では基本をおろそかにしないことを肝に銘じています。何度も基本事項を確認することは地道で手間のかかる作業ですが、手を抜くと思えば、手は抜くと思ってしまう。法科大学院2年次の冬からは学生同士で自主ゼミを開催。同期の岡田さん、大崎さん、米原さん、石島さん、橋本さん、大西さんと切磋琢磨して、4人も一発合格。

日本認知科学会論文賞 澤研究室・大北さんら受賞



論文賞を受け取る大北さん(右)

大学院文学研究科澤研究室の大北碧さん(日本学術振興会特別研究員・PD)、澤幸祐教授(心理学)、澤研究室の論文が、日本認知科学会論文賞を受賞した。論文題目は「ヒトウマインタラクションにおける『人馬一体』感とは何か?」(『認知科学』2018年25巻4号掲載)。筆者はほかに、二瓶正登さん(院文博2、心理学専攻)、西山慶太さん(平21商本学職員)。騎手が感じる人馬一体感とはどのような感覚で、どのような時にその感覚が生じるのか明らかにした。

知の発信

科研費採択研究から



文学部教授 中垣 恒太郎

放浪者たちはアメリカをどのように見つめ、今、どこに向かっているのか。これが研究の大きなテーマです。

放浪者が紡ぐアメリカの物語

40年ごろ、「T」が現れる時代と一致します。ハックは父親の暴力から逃れ、逃亡奴隷のジムとともに自由を求める冒険を繰り広げます。一方、チャプリンの映画では、共同体からはみ出した放浪者が民衆の人気を集めました。これらの物語は、階級や人種問題など現代にも通じる根深い問題をほらんでいます。アメリカは自由と平等と民主主義の理念で作られた国であるはずなのに、現実はずいぶん違う。アメリカ文化は「アメリカとは何か」を常に探求している。「トランプ現象」など分断が進む現在も、その問いは続いています。アメリカ文化研究として、ゼミでは「思春期文化」、つまり10代をめぐる物語をテーマにしています。アメリカ文化への関心や憧れは、かつてほどではありません。しかし学生には英語のみならず外国の文化にぜひ触れてほしい。小説や映画、音楽など多くの作品を鑑賞し、分析することで多様な気づき、私たちの周りの世界をも捉え直すことができます。好きな対象について言語化していくところから、学びが深まってくるのです。

(ながかき・こうたろう) 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。専門はアメリカ文学、比較メディア文化研究。著書に『マーク・トウエインと近代国家アメリカ』など。